

消化器外科専門医筆記試験問題（第 16 回より抜粋）

- 1 食道胃静脈瘤を伴う肝硬変症について正しいのはどれか。
- 肝血流中の門脈：肝動脈血流量比は 3：1 程度である。
 - 心拍出量は増大し、末梢血管抵抗は減少する。
 - 門脈圧は 120mmH₂O 程度である。
 - Hassab 手術では脾臓を温存する。
 - 肝内門脈閉塞により類洞前で血管抵抗が増大し門脈圧亢進症となる。
- 2 EBV 関連胃癌について誤っているのはどれか。
- 日本人胃癌の 10% 程度を占める。
 - 胃体部・噴門部における頻度が高い。
 - 組織学的にはリンパ球浸潤性間質を示す。
 - 進行癌ではスキルス胃癌が多い。
 - 粘膜内病変部で小型の腺管が不規則に分枝、癒合する lace pattern が特徴とされる。
- 3 結腸癌の肝転移について誤っているのはどれか。
- 肝動注療法の奏効率は約 30% である。
 - 肝切除は可能であれば最も有効な治療法である。
 - 肝切除の際、肝所属リンパ節郭清は施行されない。
 - 凝固療法（MCT, RFA）の適応は大きさ 2～3cm までのものが良い。
 - 同時性肝転移よりも異時性転移の方が予後が良い。
- 4 65 歳の男性。食道切除術を施行した切除標本の病理像（写真 1）を示す。病理学的壁深達度診断について正しいのはどれか。
- m1
 - m3
 - sm1
 - sm3
 - mp
- 5 早期胃癌に対する内視鏡的粘膜切除術（EMR）について正しいのはどれか。
- 未分化型、潰瘍合併なし、2cm の M 癌は適応である。
 - 分化型、潰瘍合併あり、2cm の M 癌は適応である。
 - 分化型、潰瘍合併なし、5cm の M 癌は適応である。
 - EMR 後の組織学的検索の結果、分化型 M 癌で水平断端（+）、深部断端（-）、脈管侵襲（-）の場合は総合的根治度 EB となる。
 - EMR 後の組織学的検索の結果、分化型 M 癌で水平断端（-）、深部断端（-）、脈管侵襲（+）の場合は総合的根治度 EB となる。
- 6 誤っているのはどれか。
- NSAIDs による胃粘膜障害は内因性プロスタグランジンの低下が主な発生機序である。
 - 胃潰瘍出血の内視鏡止血にはクリップ法、エタノール局注法などがある。
 - 十二指腸潰瘍穿孔の治療方針決定には US、CT が有用である。
 - 迅速ウレアーゼ試験は非侵襲的な *Helicobacter pylori* 感染診断法である。
 - 穿孔性十二指腸潰瘍の *Helicobacter pylori* 感染率は比較的低いとされる。
- 7 吻合について誤っている組合せはどれか。
- Double stapling technique（DST）
—————circular stapler
 - 三角吻合—————端々吻合
 - Gambie 吻合—————1 層層々吻合
 - 機能的端々吻合—————手縫い吻合
 - T 式持針器—————結腸囊肛門吻合術
- 8 抗癌剤の有害事象として誤っている組合せはどれか。
- CDDP（シスプラチン）—————腎障害
 - MTX（メトトレキサート）—————神経障害
 - 5FU—————皮膚障害
 - 塩酸イリノテカン（トポテシン）—————心筋障害
 - サイクロフォスファミド（エンドキサン）
—————無精子症

- 9 誤っている組合せはどれか。
- a Zenker 憩室 ————— 圧出性憩室
 - b Boerhaave 症候群 ————— 特発性食道破裂
 - c Barrett 食道 ————— 食道腺癌
 - d Bochdalek 孔ヘルニア ————— 胸骨後ヘルニア
 - e Mallory-Weiss 症候群 ————— 消化管出血
- 10 誤っている組合せはどれか。
- a 輪状膵 ————— ventral bud
 - b 非開放性膵損傷 ————— delayed onset
 - c 胆石性急性膵炎 ————— Opie's theory
 - d 貯留嚢胞 ————— true cyst
 - e 膵管空腸側々吻合 ————— Du Val procedure
- 11 大腸憩室症について正しいのはどれか。
- (1) 真性憩室である。
 - (2) 若年者は左側，高齢者は右側に多い。
 - (3) 日本は左側，欧米は右側に多い。
 - (4) 食生活の欧米化が原因とされている。
 - (5) 穿通臓器として膀胱が最も多い。
- a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3)
 - d (3), (4) e (4), (5)
- 12 Billroth I 法術後の吻合部潰瘍で正しいのはどれか。
- (1) 残胃の胃酸分泌機能残存が原因である。
 - (2) 胆汁酸の胃内逆流が原因である。
 - (3) 十二指腸内のアルカリ化が原因である。
 - (4) 幽門保存で幽門洞 G-細胞残存は原因にならない。
 - (5) 吻合部の十二指腸側に発生する。
- a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3)
 - d (3), (4) e (4), (5)
- 13 潰瘍性大腸炎について正しいのはどれか。
- (1) 下腹部痛と便秘で発症することが多い。
 - (2) 若年発症例では重症例が多い。
 - (3) 腸管外合併症として壊疽性膿皮症がある。
 - (4) 狭窄が原因で手術適応となる例が多い。
 - (5) 発症3年経過例には dysplasia と大腸癌発生頻度が高い。
- a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3)
 - d (3), (4) e (4), (5)
- 14 53歳の男性。食欲不振を主訴に来院した。来院時肝機能障害を指摘され、HCV 抗体陽性、CEA 3.0 ng/ml (正常値 6.0 以下)、AFP 14.630ng/dl (正常値 10.0 以下)、CA19-9 37.4 単位 (正常値 37 以下)であった。
- 造影CT像 (写真 2a, 2b, 2c, 2d) を示す。
- 正しいのはどれか。
- (1) 腫瘍の主座は肝左葉内側区域である。
 - (2) 下大静脈内に腫瘍栓を認める。
 - (3) 全肝血流遮断 (THVE) が手術時の出血制御に有用である。
 - (4) 肝門部リンパ節郭清が必要である。
 - (5) 高分化型肝細胞癌である。
- a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3)
 - d (3), (4) e (4), (5)
- 15 中心静脈栄養に関して誤っているのはどれか。
- (1) 胆嚢腫大を生じやすい。
 - (2) 大腿静脈からの投与が第一選択となる。
 - (3) 長期施行例における亜鉛欠乏の初発症状はアフタ性口内炎である。
 - (4) 高血糖管理時のインスリンは、ボトル内に混ぜての投与は避ける。
 - (5) 合併症の代謝性アシドーシスの原因の1つはビタミン B1 欠乏である。
- a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3)
 - d (3), (4) e (4), (5)
- 16 誤っているのはどれか。
- (1) ヨード染色法では異所性胃粘膜は不染となる。
 - (2) トルイジンブルー染色法では正常扁平上皮は不染となる。
 - (3) 超音波内視鏡検査では正常食道壁は6層構造に描出される。
 - (4) 食道内圧検査ではアカラシアは下部食道括約帯圧が2峰性になる。
 - (5) 24時間 pH 測定検査では pH4 以下の逆流が評価対象となる。
- a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3)
 - d (3), (4) e (4), (5)
- 17 正しいのはどれか。
- (1) IFN γ の主たる産生細胞はNK細胞、T細胞などである。

- (2) 早期癌患者に比べ高度進行癌患者でツベルクリン皮膚反応は陽性率が高い。
- (3) 加齢により Th2 から Th1 サイトカインへのシフトが起きる。
- (4) 免疫賦活剤の臨床的効果に関する科学的エビデンスはない。
- (5) 担癌進行状態では自然免疫系、獲得免疫系ともに比較的良好に保たれている。
 - a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3)
 - d (3), (4) e (4), (5)

18 胃癌について正しいのはどれか。

- (1) 早期癌で占居部位の多いのは胃体部 (M) である。
- (2) スキルス胃癌の早期発見では胃体上部の IIc 病変を見落とさないことが重要である。
- (3) 印環細胞癌は最も肝転移を起こし易い。
- (4) 膵臓に浸潤している場合は、治癒切除は望めない。
- (5) 再発形式で最も多いのは腹膜播種性転移である。
 - a (1), (2), (3) b (1), (2), (5)
 - c (1), (4), (5) d (2), (3), (4)
 - e (3), (4), (5)

19 嫌気性菌について正しいのはどれか。

- (1) アミノ配糖体は無効である。
- (2) 嫌気性菌は誤嚥性肺炎の原因菌となる。
- (3) 血流の多いところでは増殖しにくい。
- (4) クリンダマイシンは *Bacteroides fragilis* に無効である。
- (5) 口腔内嫌気性菌にはセフェム系抗菌薬が無効である。
 - a (1), (2), (3) b (1), (2), (5)
 - c (1), (4), (5) d (2), (3), (4)
 - e (3), (4), (5)

20 肝静脈の解剖について正しいのはどれか。

- (1) 左肝静脈と中肝静脈は別々に下大静脈に流入する。
- (2) 肝中央二区域切除の施行においては中肝静脈を切離する。
- (3) 尾状葉全切除術の施行においては短肝静脈をすべて切離する。

- (4) 右肝静脈は前区域と後区域の間を走行する。
- (5) 左肝静脈は外側区域と内側区域の間を走行する。
 - a (1), (2), (3) b (1), (2), (5)
 - c (1), (4), (5) d (2), (3), (4)
 - e (3), (4), (5)

21 癌治療における臨床試験について正しいのはどれか。

- (1) 抗癌剤における第 1 相試験では最大耐用量を決定する。
- (2) 完全脱毛は CTCAE (Common Terminology Criteria for Adverse Events) の Grade4 である。
- (3) 第 2 相試験のプライマリーエンドポイントは生存率である。
- (4) 無作為比較試験の場合には、統計学的信頼性のため α エラーを 0.05 以下に抑える。
- (5) 臨床試験の中間解析で得られた結果でプロトコールが打ち切られることがある。
 - a (1), (2), (3) b (1), (2), (5)
 - c (1), (4), (5) d (2), (3), (4)
 - e (3), (4), (5)

22 胃の解剖について正しいのはどれか。

- (1) 膈体尾部の後面の癒合筋膜を Toldt の筋膜という。
- (2) 右下横隔動脈の分枝は噴門小彎へ向かう。
- (3) Auerbach 神経叢は主に粘膜下層に分布する。
- (4) 幽門括約筋は胃輪状筋が肥厚したものである。
- (5) 胃は消化管発生学的には中腸に属する。
 - a (1), (2), (3) b (1), (2), (5)
 - c (1), (4), (5) d (2), (3), (4)
 - e (3), (4), (5)

23 食道癌のリンパ節転移について誤っているのはどれか。

- (1) 胸部下部食道癌では上縦隔リンパ節郭清が必要である。
- (2) 胸部中部食道癌では腹部リンパ節転移が認められる。
- (3) 左反回神経沿リンパ節の郭清は省略し得る。
- (4) SM 癌のリンパ節転移率は約 10% 程度である。
- (5) リンパ節転移は必ず傍食道リンパ節から始まる。

る。

- a (1), (2), (3) b (1), (2), (5)
c (1), (4), (5) d (2), (3), (4)
e (3), (4), (5)

24 先天性胆道拡張症について正しいのはどれか。

- (1) 女性に多い。
(2) 日本人に多い。
(3) 3徴候としては黄疸、発熱、腹痛が挙げられる。
(4) 膵・胆管合流異常が70%に見られる。
(5) 成人例では癌化することが多い。
a (1), (2), (3) b (1), (2), (5)
c (1), (4), (5) d (2), (3), (4)
e (3), (4), (5)

25 36歳の男性。既往歴で虫垂切除術を受けている。約6か月前より時々下痢、腹痛があった。2か月前より下痢が多くなり、10行/日程度の水様性下痢と肛門部痛を認めるようになった。この間の体重減少が2kg。腹痛は食事との関係はない。受診時検査所見：赤血球380万、白血球8,500、Hb10.3g/dl、Ht36.3%、血小板45万、血清総タンパク7.0g/dl、アルブミン3.4g/dl、CRP1.5mg/dl、血清総ビリルビン0.2mg/dl、AST16単位、ALT20単位、ALP145単位、血清クレアチニン0.5mg/dl、尿素窒素10mg/dl、空腹時血糖76mg/dl。

考えられる疾患はどれか。

- (1) 家族性大腸ポリポーシス
(2) 潰瘍性大腸炎
(3) 単純性腸潰瘍
(4) Crohn病
(5) 虚血性腸炎
a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3)
d (3), (4) e (4), (5)

26 62歳の男性。15年前より痔瘻にて近医に通院していた。最近粘液状分泌物が増え、しこりも大きくなったため、当院に紹介された。腫瘍は硬く、波動はなく、圧痛もない。(写真3)を示す。適切な治療法はどれか。

- a 切開排膿
b Seton法
c 局所切除術
d 放射線化学療法

e 腹会陰式直腸切断術

27 49歳の男性。検診で上部消化管内視鏡検査を受け、胃体下部前壁に15mm大の境界明瞭な隆起性病変を指摘された。

内視鏡像(写真4a)と組織像(写真4b)を示す。正しいのはどれか。

- a Cajal介在細胞に由来する腫瘍である。
b 消化管のなかでは胃が好発部位である。
c 半数以上例に全身症状を伴う。
d 転移部位は肝が最も多い。
e 半数例でリンパ節転移を生じている。

28 50歳の男性。検診の腹部USで膵頭部に径4cmの嚢胞を指摘され紹介となった。腹部平坦、軟。圧痛は認めず。

入院時検査所見：赤血球405万、Hb13.5g/dl、白血球7,200、血清総ビリルビン1.0mg/dl、AST25単位、ALT23単位、ALP8単位、 γ -GTP36単位、LAP160単位、CEA2.5ng/ml(正常5以下)、CA19-919単位(正常37以下)。

腹部US像(写真5a)、ERP像(写真5b)を示す。正しいのはどれか。

- (1) 嚢胞内に結節を認める。
(2) 主病変は分枝膵管である。
(3) 膵頭切除術の適応である。
(4) 漿液性嚢胞腫瘍である。
(5) 組織所見で卵巣様間質を認める。
a (1), (2), (3) b (1), (2), (5)
c (1), (4), (5) d (2), (3), (4)
e (3), (4), (5)

29 60歳の男性。3年前発症の潰瘍性大腸炎で、1か月前から排便回数が10回/日と増加し、2週間前から腹痛、38℃の発熱、下血の増加を認めて来院。潰瘍性大腸炎の再燃の診断で入院した。

入院後の検査所見で白血球15,000、Hb12.0g/dl、TP5.0g/dl、血清アルブミン2.8g/dl、血清Na138mEq/l、K3.0mEq/l、Cl105mEq/l、CRP8.0mg/dl、赤沈50mm/hrであった。重症と診断し、プレドニゾロン1mg/kg/日の強力静注療法と血球成分除去療法を施行した。治療開始1週間後には排便回数8回/日、37.5℃の発熱をみとめ、下血は持続していた。

この時の注腸造影エックス線像(写真 6a, 6b)を示す。

誤っているのはどれか。

- (1) 中毒性巨大結腸症の発生に留意する。
- (2) 下痢に対しては止痢剤は禁忌である。
- (3) 造影検査では潰瘍は浅いため、保存的治療をさらに続ける。
- (4) 回腸人工肛門を造設する。
- (5) 結腸亜全摘, S 状結腸粘液瘻造設術を行う。
 - a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3)
 - d (3), (4) e (4), (5)

30 55 歳の男性. 5 年前から肝機能障害を指摘されていた。

血液所見: 白血球 2,500, Hb 8.4g/dl, 血小板 5.3 万。

血清生化学所見: 総ビリルビン 3.8mg/dl, AST 74 単位(基準 45 以下), ALT 61 単位(基準 40 以下), HCV 抗体陽性。

肝 S8 に腹部血管造影検査と腹部造影 CT (動脈相) で濃染, 門脈相で低濃度域に認識される直径 2cm の結節性病変を 1 個認めた。

この患者に対して適応となる治療法で 5 年生存率が最もよいのはどれか。

- a 肝動脈塞栓療法
- b 抗癌剤動注療法
- c ラジオ波焼灼療法
- d 肝切除
- e 生体肝移植

写真 1

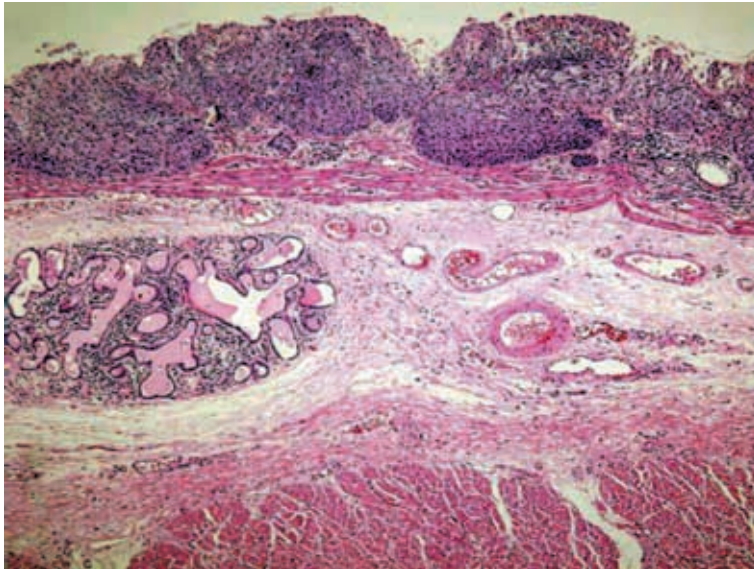


写真 2a

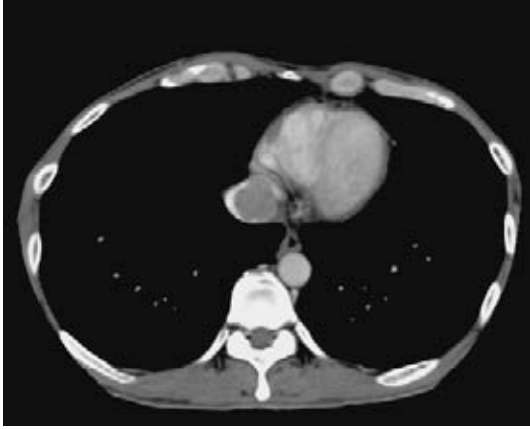


写真 2b

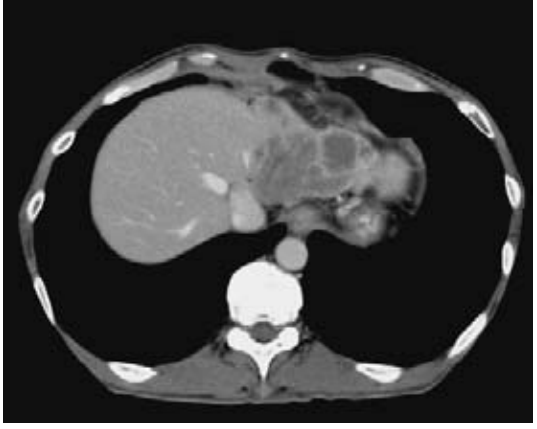


写真 2c

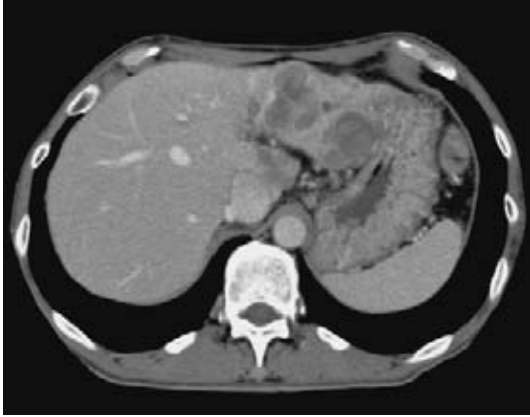


写真 2d



写真 3



写真 4a



写真 4b

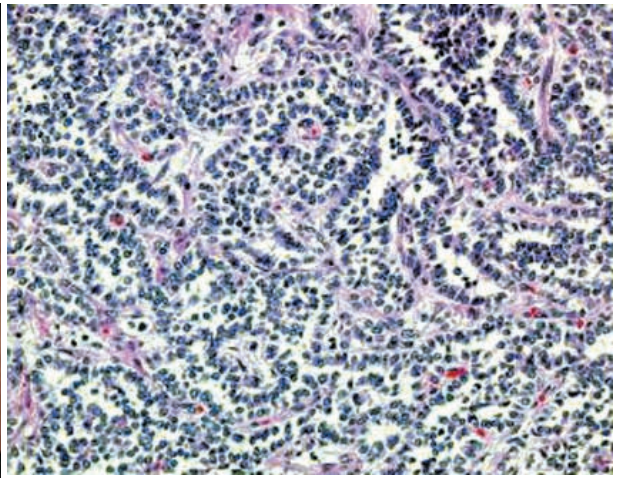


写真 5a



写真 5b



写真 6a



写真 6b

